

一八八四年三月二日(日)

ドツキネーシヨル
南神の寺院にて

ドツキネーシヨル
南神の寺院でナレンドラたちと共に

タクル、聖ラーマクリシュナは、カーリー寺院内のあの馴染の部屋で、小寝台の上にお坐りになって歌をきいていらつしやる。ブラフマ協会のトライローキヤ・サンニヤル氏が歌っているのである。

今日は日曜日。ベンガル暦一二九〇年フアルグン月二十日、白分五日目。キリスト暦一八八四年三月二日。信者たちは床に坐つて歌をきいている。ナレンドラ、スレンドラ・ミトラ、校長、トライローキヤはじめ、大勢が坐っている。

ナレンドラさんの父上は高等裁判所の弁護士をしておられた。その方が急に他界されたので、家族一同は非常に困っていた。最近では食べるものにも事欠くような状態らしい。長男であるナレンドラは、そのため大変な苦勞をしている。

タクルの腕の怪我は、まだ完全によくなっていない。もうずいぶん何日も包帯をしたままである。トライローキヤは大実母の歌をうたっている。クマーよ、君のみ胸にかきいただき、裳裾もすそで我をかく

まい給えぐと歌っている。

大実母よ 君のおん胸に

日も夜も我はいだかれて

やさしき顔容仰ぎつつ

母よ 母よ 母よと 甘え泣く

歓喜の海に沈みきて

大いなるヨーガに

わがまなこ またた 瞬きもせで

君の面に見入るばかり

見るも聞くも恐ろしきこの世に

身も心も震えおののき

母よ み胸にわれを抱きて

裳裾のひだにかくまい給え

1884年3月2日(日)

タクルルはこの歌をきいて、愛の涙にむせびながらおっしやる——「アハー！ 何という心情バウヴァ！」

トライローキヤは再び歌った——

わがハリよ 恥こぼを壊こぼちたまうものよ

(見よ 見よ おお希のぞみは叶のぞえられたり)

信者たちの誇りを おお至バウヴァ聖バウヴァよ

君なくしてまた誰だが保たたん

君 いのちの主よ いのちの支えよ

君がとこしえの僕しもべぞ 我われは！

(見よ 見よ 見よ 見よ おお！)

あなたの御足を一番大事なものとして

カーストや氏族の誇りを捨て去り

恥と恐れは水で洗い流し

旅人となった私は さて何処どこに行こう

あなたのために悪者のように言われ
腫れ物か麻疹はしかのように人びとは嫌う
あなたを好きなのが愚かだと言って
市場バザールの人びとは罵ののしりあざける

恥も尊敬も死ぬことさえも

すべてはもれなくあなたの意のまま

でも下僕しもべの重さは主人の重さ

わが主の わが心の愛人つまのすべて意のまま

家を出て ハリに魅入られたこの私に

聖き御足みあしのもとに住居すみかを与えておくれ

いのちの限り 日毎 夜毎に

愛の帯で魂をかたく縛り

このブレーマダースを救っておくれ

1884年3月2日(日)

タクルルはまた愛の涙にむせび、床に下りてきてお坐りになった。そして自ら、ラームプラサードの歌をお歌いになる――

よきな 悪名 苦き水 甘き水

すべてみな 君のものなれ

母よ 水の女神よ 何ゆえに

水に境のあるかと見するや

タクルルはトライローキヤにおっしゃる――「ア、お前の歌はすばらしいねえ！ お前の歌はまさしくホンモノだ。海に行つたことのある人だけが海の水を持って来て見せられる」

トライローキヤは再び歌う――

ハリよ――

あなたが踊り あなたが歌い

あなたが手拍子までも打つ

人はあやつり人形なのに

私が 私が と言っている

ハリよ わが主 ハリよ

人の一生はそれそのままに

廻りまわり灯籠とうろうに映る影

あなたの意のままに動くなら

神の国にも行こうもの

からだの道具はあなたで動き

たましいの車は あなたで進む

犯した罪に苦しむ人は

自由があると思つた報い

あなたはすべての根みなもとの源よ

いのちのいのち 心のあるじ

あなたの徳と恵みによつて

悪人も聖者になろうもの

〔サツチダーナンダと生物・世界は不異おなじ——永遠遊戯三昧——完全智、或いは大覚智〕
The Absolute identical with the phenomenal world

歌は終わった。タクルはトライローキヤはじめ多数の信者たちとお話をなさる——。

聖ラーマクリシュナ「ハリが主人であり、ハリが召使である——この態度(氣持ち)が完全な智慧のしるしだ。はじめの間は、これでもない、これでもない」と打ち消して、ハリだけが真実で、他はすべて虚仮だと感じる。その後その人は、ハリがすべてに成っていらつしやる——神そのものがマヤーにも生き物にも世界にも、すべてに成っていらつしやることのはつきりわかるんだ。往くところまで往つてから還かえってくるんだよ。これがプラーナの考え方だよ。一つのベルの実は果肉みと種たねと殻かとでできている。殻と種をとつて果肉だけを取るわけだが、ベルの実の目方を量るときは、殻と種をとつてしまつては話にならないだろう。だから、はじめのうちは生き物も世界も打ち消してサツチダーナンダにたどりつくが、その後、サツチダーナンダを体得つかんだら、サツチダーナンダ自身が生き物や世界全部に成っているのだ、ということがわかる。果肉が本体(本質)で、種子や殻もその本体からできている。つまり、バターミルクにバターがあり、バターがあるからバターミルクがあるというように——。

でも、誰かこう言うかも知れないね——サツチダーナンダがどうしてこんなに固まったのかしら、と。この世界は触るとほんとにコチコチに固く感じられる。その答えはこうだよ。血液と精液はあんなに水っぽい物質なのに、あれからこんなに大きな生き物——人間だの獣だのが出来上がる！ あの御方は何でもお出来になるのさ。

いちど完全円満なサッチダーナンダまで往って、それから下りてきてこの宇宙すべてを見てごらん」

〔世間も神の外に存在せず——ヨーギーと信仰者の相異〕

「あの御方がすべてのものになっていらつしやる。世間のことだって、あの御方を除けたら何一つ存在しない。ラーマは、グルのところまでヴェーダを勉強して離欲の気持ちになった。世間というものが空しい夢幻であるならば、世を捨てた方がいいと言う。父王ダシヤラタは大そう心配して、ラーマを諭すためにヴァシシュタ師をつかわした。ヴァシシュタはこう言つて諭した。『ラーマよ、君が世間を捨てようというのはどういう理由だね？ 君、わたしに説明してくれないか、この世が神の外にあるということ。もし、神からこの世が生じたのではない』という証明ができたら、世を捨ててもよろしい』ラーマは黙つてしまつて何の返答もできなかった。

すべての実質(物質)は、最後に、空(原、理(空質))に溶けこむ。また創造のときが来ると、空質から大原質、マハットから自我意識というふうにだんだんに造られてくる。展開と収縮(帰入)だ。神の信者はあらゆるものを受け入れる。信仰者は完全円満なサッチダーナンダをも受け入れるし、生き物や世界をも受け入れる。

だが、ヨーギーの道は別だ。ヨーギーは至上我に達するとそこから戻つてこない。至上我と一つになつてしまふんだよ。

一つのもののなかにだけ神を見る人を部分智者と言ふ。こういう人は、『そっちの方には神はいな

い！」と思つてゐる。

信者には三つの段階があつてね、低い信者はこう言う——『ああ神よ、大空の彼方にいます御方よ』
 中位の信者はこう言う——『あの御方は胸のなかに、我等のすべてを見通すものとして在す』上の信
 者は言う——『あの御方はすべてのものに成つていらつしやる。自分の見るものすべて、一つ一つが
 あの御方の姿だ』前によくナレンドラがふざけて言つてたよ——『あの御方はすべてのものに成つて
 いらつしやる——だから、神はこの壺です。神はこのコップです』(一同笑う)

〔見神によつて疑いは消滅する——義務の脱落——ヴィラート・シヴァ〕

「だが、あの御方に会えば、疑いはすべて消えてなくなる。聞くことと見ることは別だ。聞いただけ
 では十六アナ(100%)信じられない。直接会つてみれば文句なしに信じられる！」

神を見た後は義務つとめから解放される。わたしも決まり通りの礼拝つとめはしなくなつた。カーリー殿で祭祀
 や礼拝をしていたものだがね。突然、あらゆるものが霊チンマイだということを見せてもらつた——お水入
 れも銅皿も祭壇もお堂の扉も——何もかも霊なんだ！人間も獣も——みんな霊なんだ！そのとき
 わたしは気狂いみたいになつて、あたり一面に花をまき散らしたよ！見るものすべてを拝んだよ！
 ある日のこと、礼拝のときにシヴァの頭にベルの葉をのせていた、ちようどそのとき、見せてもらつ
 たよ。このヴィラート(神の体としての宇宙)の相すがたそのものがシヴァだということ——。そのときはシ
 ヴァの像だけを礼拝することはできなかつた。花を摘んでいたとき、突然、花を咲かせている木の

つ一つが既に神前花束なんだ、ということを見せてもらった」

〔詩情と見神とは違う——詩ではなく宇宙の主人公〕

トライローキヤ「ああ、神の創造は美しいうございますねえ！」

聖ラーマクリシュナ「そうじゃない、ほんとにサツとひらめいて見えたんだよ！ アレコレ考えたんじゃない。一本一本の花の木が一つ一つ花束だと、あのヴィラートの姿を飾っているのだと見せてもらったんだよ。その日から花摘みは出来なくなつた。わたしは、人間もそれと全く同じに見える。あの御方が人間の体をまとつてふらりふらりと歩いていらつしやる——ちやうど波の上に枕が漂つているように——枕があつちへフラリ、こつちへフラリと動いて波のまにまに上がつたり下がつたりしているようにね」

〔タクールが肉体をまとつているのは何故か？——タクールの希のぞみ〕

「からだ肉体は二日ばかりのものだ。あの御方だけが実在で、肉体は今あつたかと思えば、もうない。ずいぶん以前のことだが、腹をこわしてえらい難儀をしていたとき、フリタイがこう言つた——『大実母マに一度お願いしたらどうですか。病気が治るようにつて』わたしはマの前で病氣の話をするのが何とも恥ずかしくつてね、仕方がないからこんなふうに言つてお願いした。——『マ、アジア協会の博物館で人間のガイコツを見たら、骨を針金でつないで人間の形にしてあつたよ。マ、あんな具合

に、わたしの体をも少しシツカリさせておくれ。そうすりゃ、あんたの名をとなえたり讃歌を歌つたりできるから』

生きたいという欲は何故あるんだろうね？ ラーヴァナを殺してから、ラーマとラクシュmanaはランカーの都にお入りになった。ラーヴァナの宮殿に行つてみると、ラーヴァナの母親のニカシャーが逃げ出した。ラクシュmanaは不思議に思つて兄に質問した——『ラーマ兄上、ニカシャーは家族全部を失つたのに、まだ命が惜しいのでしょうか？』ラーマはニカシャーを連れてこさせて、『怖がることはない。お前はこういうわけで逃げ出したりするのかね？』ときくと、ニカシャーは答えた。——『ラーマ！ わたしや怖くて逃げたんじゃありませんよ！ 生きていたればこそ、ここまであんなのリーラーを眺めることができた。もつと生きていけば、もつと先まであんなのリーラーが見られますからね！ そのために生きていたいのです』

欲望がなければ、肉体は保たない。

ハツハツハツハ、わたしにだつて一つや二つは欲があつた。マーにこうお願いしたよ。『マー、女と金を捨てた人ときあわせてください。それから、あんなの智者ジユニや信者バクサと交際させてください。そのためにもう少し体力をさずけて歩けるようにしてください——あちこちに行けるように』でも、まだ歩く力は充分じゃない！

トライローキヤ「はははは……。希のぞみはみな叶えられましたか？」

聖ラーマクリシュナ「アハハ……。まだちつと残っているさ（一同笑う）。

肉体は二日ばかりのものだ。腕をケガしたとき、マーにこう言った。『マー、すごく痛いんだよ！すると、馬車と馱者を見せてくださったよ。馬車はあちこちでネジ釘がゆるんでいる。馬車は馱者のなすがままに進んでいる。馬車は自分じゃ何も出来ないんだ。

それでも体に気を使うのは何故だろう？ それはね、神様といっしょにいろいろ楽しみたいからさ。あの御方の名をとえたり、讃歌を歌ったりしたいし、あの御方の智者や信者に会いに行くためな
さ」

ナレンドラと共に——ナレンドラの幸不幸——肉体の幸不幸

ナレンドラは床の上でタクルルの前に坐っている。

聖ラーマクリシュナは、トライローキヤはじめ他の信者たちに向かってお話しになる——

「肉体を持つていれば、どうしても幸福と不幸はついて廻るよ。ごらん、ナレンドラを——。お父さんが亡くなって、家はとても困っている。どうにも方法がないんだ。あの御方は幸福にしておいて下さる時もあるし、不幸にしておく時もある」

トライローキヤ「そうです。神がナレンドラに慈悲を垂れてくれるでしょう」

聖ラーマクリシュナ「あはははは、いつ助けてくれる？ カーシーのアンナプルナ神殿では誰も飢えることはないが、でも、人によっては朝から晩まで坐って待っていないけりやならない。

フリダイがシャンブー・マリツクに金の無心をしたことがある。シャンブー・マリツクはイギリス

人みたいな考えの人だからね、こう言った——『どうして君に金をあげなけりやならないのかね？君は自分でどうにかやっていけるし、現にいくら稼いでいるじゃないか。でも、非常に惨めな人の場合は別だよ。たとえばメクラとかピッコのようなカタワだとか……。そういう人たちに恵むのなら意味はある』と。そのときフリダイはこう答えた——『先生！もうおっしゃいますな。私はもう、金はいりません。神様、私をメクラやピッコやもつと惨めな境遇に置くようなことはやめて下さい。もう、あなたは金を下さる必要はありませんし、私もいただく必要はございません』

〔ナレンドラと無神論——神の行動とピーシユマ様^{デレウマ}〕

神がナレンドラに対してまだお恵みを下さらないので、タクールはいささか腹を立てているかのよう^{まなぞ}にこの話をしていらいっしやる。タクールはナレンドラの方へ時々やさしい眼差しを向けていらいっしやる。

ナレンドラ「私は無神論を勉強しています」

聖ラーマクリシユナ「有神論と無神論があるが、どうしてまた有神論の方を勉強しないんだ？」

スレンドラ「神は公平であられます。必ず信者を見ていて下さるでしょう」

聖ラーマクリシユナ「お経にこうあるよ。前世で慈善をした人たちが、今生で金持ちになると！そんなこと、どうしてわかる？この世はあの御方のマーヤーなんだよ。マーヤーの中には目茶苦茶なことがたとあるんだ。何もわかりやしないよ！

神様のなさることが、わたし等にわかるものか。ビーシユマ様デレツワは矢でつくった寝台にねていた。パーンダヴァの兄弟たちがクリシユナといっしょに会いに来た。来てしばらくすると、ビーシユマ様デーツワが泣いていらつしやる。パーンダヴァの兄弟はクリシユナに言った。「クリシユナ、何としたことでしょう！ 祖父ビーシユマは八天人ヴァスの一人です。しかも類みづいない智者なのです。これほどの御方でも、死ぬときにマーカーに惑わされてお泣きなさるとは！」

クリシユナは、『ビーシユマはそんなことで泣いているのではない。なぜ泣いているのか、尋ねるがよい』と言った。そして、本人に聞いてみるとこう答えた——『クリシユナ！ 神のすることはさっぱりわからない！ ナーラーヤナの化身（クリシユナ）がいつもいっしょについて下さるのに、パーンダヴァの兄弟たちの苦難はいつ果てるとも見通しがたたないので、それで私は泣いているのですよ！ このことを考えると、私は神の行動が何一つわかっていないと言うことがわかりましてねえ！』

〔純粹真我シュツダートマのみ不動不変——スメール山のように〕

「わたしにあの御方が見せて下さったのは至上我パフラートマ——ヴェータではシュツダートマと言っているが、それだけがスメール山のように唯一不変のもので、幸不幸を超越しているということだ。あの御方のマーカーの活動は、ずい分混乱している。コレの後にはアレが来るだろうとか、コレからソレになるだろうとか、決して言えるものじゃないんだ」

スレンドラ「はっはっはっは、前世で慈善をすると金持ちになるのですたら、私どももせいぜい慈善をしなければ——」

聖ラーマクリシュナ「金のある人は施すことだ。(トライローキヤに向かつて) ジャイゴパール・センは金持ちなんだから、慈善をするべきなんだ。そうしなけりや恥ずかしいことだ。金を持っているのにケチケチ出し惜しみをする人がいるが、後で誰がその金を無駄な快樂のために浪費するのか、わかっちゃいないんだよ。

先だつてジャイゴパールが来た。馬車に乗ってきたよ。馬車のランタンは壊れているし、馬はゴミ捨て場からいま戻つて来たというよな馬で、馭者は、ただ今大学病院から退院してきましたというようだったし——。そして、ここに持つてきたのは腐りかけたザクロの実が二つ——」(一同笑う)

スレンドラ「ジャイゴパールの旦那はブラフマ協会の会員でございます。今はケーシヤブ氏のブラフマ協会には、たいした人物はいないようでございます。ヴィジャイ・ゴースワミーやシヴァナートやほかの方々は、サーダーラン・ブラフマ協会というのをつくつております」

聖ラーマクリシュナ「ゴーヴィンダ・アディカリーは自分の劇団に優れた人を置いておかない——分け前をたくさんやらなけりやならんからといって、アハハハハ(一同笑う)。

ケーシヤブの弟子の一人に先だつて会つたが、ケーシヤブの邸で芝居をしたんだよ！ 見たら、その弟子は子供を抱いて舞台上で踊つていた！ 聞けば、その人が講義レクチャーをするということだった。自分が教わらなけりやいけないのに！」

その後でトライローキヤは、「至高意識チダ（いと高き心ナシダ）の海に、愛のよろこびの波はうねりて」を歌った。この歌が終わると、聖ラーマクリシユナは彼に、「あの歌もうたつてくれ、ほら、大実母ハハよ、わたしを狂わせておくれを——」